
時空の旅人

しおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空の旅人

【Nコード】

N3538B

【作者名】

しおん

【あらすじ】

ぼくはどの世界も美しいと思う。今まで訪れたどの世界もそう思えた。これからもそう思えるように、この心を忘れないように。――だからぼくは旅をやめない――

砂漠のなかで：プロローグ（前書き）

分かりにくいところが多々あるかもしれませんが！！
その辺は、あらかじめご了承ください（？）下さい！

砂漠のなかで：プロローグ

ぼくはどの世界も美しいと思う

今まで訪れたどの世界もそう思えた

これからもそう思えるように

この心を忘れないように

——だからぼくは旅をやめない

手を伸ばす。届かない。

手を伸ばす。触れない。

手を伸ばす。払われる。

いつまでさまよえば許される？

「キラ！」

ホルスは精一杯の大声で呼びかけた。

「キラ！」

「なに？うるさいよ」

キラは体を起こした。

「なんだ、聞こえてるんじゃない。僕の大声を返して」

「今、ホルスの大声のおかげで起こされた。で、何？」

「何じゃないでしょ」

ホルスが呆れた様子で言う。

「じ、か、ん」

「時間？・・・あ、そっか。そういえば起こすようにお願いしてたかも」

キラはシエガー（ホバー付きの2人用オープンカー）に乗った。

「『かも』じゃない、『かも』じゃない」

「はいはい、ごめんね。2回繰り返さなくても結構。」

「なんかご機嫌斜め？」

「・・・」

キラは無視した。

「うわっこれはもう、ご機嫌倒れてるね」

「意味分ない事言わないで。いやな夢見ただけ」

「わざわざ時間とって仮眠したのに嫌な夢見てどーすんのさ」

「言われても困る」

「どーする？次の世界行く？」

ホルスがいつも通り聞く。

「いや、もう少しいるよ。」

キラがいつも通り答える。

ひとつのシエガーが砂漠を走っていく。

砂漠のなかで：プロローグ（後書き）

連載のつもりですけど、短編でもある・・・みたいな感じです・・・
感想、意見などありましたら下さい！！

第1話：間引く国

若者がシエガー（ホバーつきの2人用オープンカー）に乗っていた。後ろに座席は荷物で埋め尽くされていた。手首にソウラ（一時的に自分の周りの空間を操れる器具）がついていた。砂漠を大きな波をつくって走っていく。

「暑い・・・ほんと、暑い」

どこからか、声が発せられた。

「97回目。」

運転手が最初の声に返事をした。

「暑すぎ・・・次の国はまだ？」
最初の声が言った。

「98回目。あと15分くらいじゃないかな。」
運転手が答える。

「何を根拠に？・・・うー暑い」
「勘。99回目」
「・・・」

二つの声はまた、無言で走っていった。

「暑・・・」

「おめでとう、ホルス。100回目達成。」

「キラは暑くないの？」

ホルスが言った。

「別に」

キラが短く返事をした。

「ありえない・・・ねえ、ソウラ使おうよ・・・ああ、暑いわああああああ！」

ホルスと呼ばれた声が急に叫んだ。

キラはシエガーを片手で運転し、ペンダントを持った手をおもいつきり横に突き出していた。ホルスとはペンダントのこのようだ。

「キキキラ！やめてえええ」

キラは再びペンダントを首にかけた。

「ああ、びっくりした。急になにをするのさ？」

「ホルス、100回目までは我慢するっていったはずだけど？」

「言ってたけど、それが？」

「101回目からは我慢しないってこと。」

「分かる分けない、そんなの」

「それと、ソウラ使うと疲れるからヤダ。」

「・・・・・・・・・・」

「着いたよ、ホルス。」

キラが言った。

「ん・・・？やつとか・・・」

すぐ近くに大きい門がたっていた。キラは門をくぐった。

「ようこそ、わが国へ。お名前は？」

武装した兵士がにこやかに話しかけてきた。

「キラです。こっちはホルス。」

キラはシェガーから降りて、ペンダントを指差して言った。

「よろしく」

ホルスが言った。

「こちらにサインして下さい。・あ、ホルスさんの結構です。何日滞在されますか？」

兵士は1枚の紙と羽ペンを差し出した。

「長くて4日。」

「ありがとうございます。わが国をお楽しみくださいね。」

キラはシェガーに跨った。寝ているホルスをペチつとたたいて起こした。ホルスはいてつと言った。

通りはにぎやかだった。キラはシェガーからおり、押して歩いた。

「あなた、旅人さん？」

「はい。」

たくさんの子供に囲まれた20代後半ぐらいの女性が声をかけてきた。

「珍しいものねえ。旅人さんなんて何年ぶりかしら。私はセリナよ。お名前を伺ってもよろしい？」

「キラです。」

「僕は「旅人さんだー！旅人さんだよ！」

子供たちがキラの周りに集まってきた。ホルスの自己紹介は子供たちの声でかき消された。

「こんにちわ」

キラが子供たちにむかって笑顔で言った。

「キラの笑顔なんて何年ぶりかしら」

ホルスがキラ以外に聞こえない小さな声でセリナの口真似で言った。

「少しお茶でもしない？」

「キラ、お茶だって！疲れたから休もう。」

ホルスがうれしそうに言った。

「ペンダントさんもそう言ってることですし。どう？」

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

「ちなみに僕、ホルスっていうから。」

セリナは、あら、そうなの？じゃあホルスさんとキラさん、こちらにどうぞ、と言って紅茶とお菓子をご馳走してくれた。キラはお礼を言った後に、尋ねた。

「セリナさん、一つ質問してもいいですか？」

「どうぞ」

セリナはにこにこしながら言った。

「どうして子供ばかりなんですか？」

「やっぱり気づいた？そんなに分かるものかしら？・・・一つは成人男性が軍隊に入るからよ。」

セリナは一呼吸置いて、いった。

「この国ではね、30歳から成人とみなされ、軍隊にはいるの。35歳になると軍隊に残るか、残らないかを自由に決められるようになってるわ。必ずみんなが軍隊に残るけどね。軍隊に入っている期間中は、軍隊意外の人と対面を禁止してあるの。」

「戻ってくる人はいない、ということですよね？」

キラが聞いた。

「ええ、そうよ。好きな人が30歳になったらそれっきり会えないってわけ。」

「セリナさんも？」

ホルスが聞いた。ホルスは遠慮というものを知らない。キラはホルスを鞆に押し込んで、

「すみません、続けてください。」

とにこやかに言った。

セリナは苦笑いした。

「いいのよ、キラくん。私の婚約者は役人だったわ。で、7年前に軍隊に入ってそれっきり。戻ってくるって約束してくれたのに・・・。」

セリナは笑って、もう昔のことだけどね、と言った。

「さて、話に戻るけど・・・あとは女性。女性は・・・なぜかまだよく分かってないらしいんだけど・・・成人になるとある病気にかかるの。」

「病気、ですか。」

「そうなの。その病気っていうのは人によってさまざまなんだけど、すごく死亡率が高いのよ。というか絶対死ぬって感じ。」

「え！それって怖いじゃん。」

ホルスが鞆の中からモゴモゴと言った。

「ええ。前は結構怖かったけど、それがこの国での寿命かになって思ったの。」

セリナは笑顔で言った。

「すごいですね。」

キラは関心した表情をしていた。

「男性は軍隊、女性は病気。だからこの国は子供ばかりなのよ。」

「そうですか・・・あの、人口は減らないんですか？」

「なんで？」

「男性はいるとしても、女性が亡くなってしまうのならどうしても人口が減ると思うんですが・・・」

セリナが少し困った顔をした。

「そうねえ・・・言われてみるとそうかも。こんなこと普段考えないから・・・でも、人口が減っているなんてこと、聞いたことないわ。成人になるまでに子供を生むんじゃない？」

「なるほど」

アルが言った。

キラは、そろそろ失礼させていただきます、いろいろとありがとうございました、と言いつつ、安めでシャワーかお風呂のある宿を知らないかと尋ねた。セリナは近くのホテルを紹介してくれた。さらに、この国のことをもっと詳しく知りたいのなら、北の役所に行くといいわよ、と親切に教えてくれた。キラは最後にもう一度お礼を言って、シェガーを走らせた。

キラは7時ぴったりに起きてホルスをはじいて起こした。ホルスは、もっと優しく起こせないのか、と文句を言った。

「今日はどこに行くの？」

「どうしようかな。とりあえず北にいったって役所にお邪魔しよう。」

キラは荷物を全部シェガーに乗せた。ホテルからでて、シェガーを走らせる。

「なんで荷物つむの？もう2日いるんでしょ？」

ホルスが言った。

「ぼくの旅は気まぐれ」

キラはそれだけ言って黙った。

北には市街地があった。そこも大半が子供だった。わずかな20〜25歳くらいの商人が売り物を売ろうと叫んでいた。

「にぎやかな国だね。子供の樂園ってやつ？」

「なかなかおもしろい国だよ。でも、やっぱり子供ばかりというのは違和感があるな。」

キラはそのまま市街地を突っ切り、役所の前に行った。

役人が急いで出てきた。笑顔で言った。

「ようこそ旅人さん！お時間ありますか？」

「ありますよ」

その一言を聞いて役人はさらに顔を明るくした。

「そうですか！もしよろしければお話させて下さい！」

「喜んで」

ホルスがキラの代わりに返事をした。

「どうぞどうぞ！」

キラは大きな部屋に案内された。長い机といすが何個か置いてあった。いすに座るよう勧められ、座った。

「旅人が訪れるのはめずらしいんですか？」

「それはもう！少なくとも僕が役人になって7年経ちますけどあなたが初めてですよ。誰かにこの国のことを教えたかったんですよ。だから僕、うれしくて！」

「うん、よく伝わってくるよ。」

ホルスが言った。

「そう？ではこの国のシステムについてお話ししてもいいですか？」

「お願いします」

「どの辺まで知っていますか？」

「30歳から成人で、成人男性は軍隊に、成人女性は病気になってこの国は子供ばかりいるってところまで」

ホルスがささず言った。

「あれ、そこまで知っていましたか。」

役人は残念そうな顔をした。

「知っていたらなにか困ったことでも？」

キラが言った。

「後説明することといえば、なんで30歳から成人だとか、軍隊に

はいるだとか、病気の研究はどこまで進んでいるかぐらいなんです」「ほうほう」「それでも構いませんよ?」「でも……うーん」

役人は唸って、悩んでいた。キラは黙って待った。そして、

「あなたは私の初めてのお客さんですから、特別お話をさせていただきます。」

役人はにっこり笑って言った。

「ラッキー!」

ホルスが言った。キラは黙ったままだった。

「本当は禁止されているんですけどね。」

役人はまじめな顔になって、話し始めた。

「実は、あなたたちが知っていることは『嘘』なんです。必ず男性が軍隊に残ること、知ってますよね?それも『嘘』です。女性は病気に罹ったりしません。全て政府がつくった『嘘』ですよ。」

「何のために?」

「人口が増えすぎたため、間引く必要があったからです。始まりは今から134年前です。一人の王様がこういいました。『国が崩壊する。知らない人間を間引け。』と。大臣たちは会議で話し合いました。『これから可能性のある子供を殺すのはもったいない。もう人生を十分生きた、40歳から間引こう』一度はこの意見で固まりました。しかし、まだ人口が多すぎました。そこで今の『30歳から』という制度になったのです。」

「間引くつてのは……」

ホルスが言った。

「殺すということです。」

役人は頷きながら言った。

「やつぱり。」

「30歳の男女、全員ですか？」

キラは言った。

「そうです。ただ、医者は例外のときがありますが。」

「殺すため……ですね。しかし、人口は減っていないと聞きましたか？」

「はい、そうです。政府が今の人口を保てるように管理してますから。毎年、間引く国民で、こちらが人工的に子供をつくります。数は決まって200。現在そのうちの50が流産するように設定します。一昨年までは40でしたよ。同時期に作りますから、みんなほぼ同じ誕生日なんですよ。今年間引く国民の子が134代目です。」

「……」

「これを134年前からずっと続けていますよ。どうです？すばらしいでしょう？増えすぎず、減りすぎず、みんなが快適に暮らせるように間引くんです。」

「……ええ、そうですね。」

キラが笑顔で相槌をつった。

「役人さんも？」

ホルスが言った。

「いいえ。私は違います。事実を知っている人は死ぬまで王様に仕えるんですよ。ただ……」

役人は少し口ごもった。

「ただ、私の前の役人さんは違いました。30歳で間引かれてしまいました。」

「なぜ？」

「それは、その人が反逆をくわだてたからです。馬鹿な人ですよ。そのまま王様につかえていれば将来は絶対約束されていたのに……。」

「ちなみに役人さんは何歳？」

ホルスが言った。

「私ですか？私は明日でちょうど30歳ですよ。明日の夜、妻と子がお祝いしてくれるんです。」

役人はうれしそうに言った。

「そうなんですか。おめでとうございます。それじゃあお話のかわりにプレゼントを。明日会えないかもしれませんが今。いいですか？」

「あれ？キラ、人にあげるものなんてあつたっけ？」

キラはペンダントを人差し指で弾いた。

「ぐっ」

ホルスがうめいた。キラはしばらく鞆をこそどそとさぐって、ひとつの本を出した。

「こんな物しかないんですが……。」

「それは？」

「『身の守り方』についての本ですよ。たぶん必要になると思いますが……。」

「『身の守り方』？大丈夫ですよ。私の一生は約束されています。でも、せっかくですから頂きますね。」

「その本が役に立たないことを祈ってるよ。」

ホルスが静かに言った。

「どういう意味？」

役人がきょとした顔で言った。キラがすくつと立ち上がって、遠慮がちに言った。

「今日はお話ありがとうございました。できればその本を今晚あたり・・・」

「キラ・・・？」

ホルスが不思議そうに声をかけてきた。キラはくすくすつと笑った。

「ホルス、ごめん。調子狂ったかい？いつもと違うからね、こんなの。」

「まっただよ。」

ホルスが呆れた様子で言った。

「あの・・・どうしましたか？」

「すみません、何でもありませんよ。今日は本当にありがとうございました。ぼくたちはホテルに戻ります。」

役人はにっこり笑った。

「こちらこそ、お話を聞いてもらえて、とてもうれしかったです。僕は今日という日を忘れません。なんせ、初めての旅人さんですから！」

キラは最後になんと言おうかと少し迷って、

「今日を大切にしてくださいね。」

と言った。そして役所を後にした。

「キラ、変」

ホルスが思ったままの感想を言った。

「自分でも、そう思うよ。」

「なんでさ？」

「分からないよ。ただ・・・」

キラは口をつぐんだ。

・・・なんていえば言い？『まっすぐな人には生きて欲しかった』
『待ち続ける人をこれ以上見たくない』思ったことはある。ただ、
それをホルスに伝える気にはならなかった。

「ただ？」

ホルスがうなぐす。

「・・・『ぼくのわずかな良心』ってやつかな」
結局それだけ言った。

キラはホテルに戻らずそのまま国を出た。何もなかった砂漠にキラたちの姿がポツリと現れた。

「この国のご感想は？」

ホルスがいつも通り聞いてきた。キラはしばらく答えなかった。

キラは急に口を開いた。
「ホルス」

「なに？」

「ぼくはジャガイモにはなりたくないな。」

「同感」

「この世界は終わりかな？」

ホルスが聞く。いつも通りの会話。

「・・・ああ。この世界にはしばらくいたからね。もういいよ。」

キラが答える。いつも通りの会話。

ペンダントから強い光が発せられた。その光が消えたときには、砂漠には何一つなかった。

キラが去った次の日、役所には別の若者がいた。

第2話：森の中

森が光った。

そして、森の静けさはいきなり破られた。

爆発音ともとれる音が鳴り響いた。獣たちが「ギャアギャア」とわめきたて、逃げていく。

ひとつの樹木の根元付近に一台のシェガー（ホバー付きの2人用オートプンカー）が引っかかっていた。

枝の折れる音がしばらく続き、やがて静かになった。

「ホルス」

澄んだ声が森に響きわたる。

「なんでございましょう？キラ様」

さっきとは違う声、おそらく『ホルス』がワザとらしい敬語で言った。

「・・・説明してくれないかな？」

キラが言う。

「そりゃ、見ての通りで」

「はぁ・・・」

森は何一つ音を立てない。

完全なる静寂だった。

キラはしばらくその場を動かなかった。

「キラ」

ホルスが言う。静かな森に嫌なほど響き渡った。キラは答えない。

「おいキラ」

ホルスはめげずに言った。森に虚しく響く。それでもキラは無視した。

「キラ！」

ホルスが大声を出す。

「何？」

キラはやつと返事をした。

「まず、僕の大声返して」

「無理」

「はやく移動しようよ？」

「そろそろ行く？」

「そーしてくれるとありがたいかな」

「それじゃあ……」

キラが急に黙った。

「ん？キラ？どうしたの？」

「静かに……」

キラが小声で言う。

それまでキラとホルスの声以外、この森全てが沈黙を守っていた。しかし、キラには「パキパキ」という微かな音を察知した。そして、それが近づいてきていることも。

「？」

ホルスはなにがなんだか分からない様子だが、おとなしく黙った。キラは刀に手をかける。

「パキパキ」

音がさらに近づいていた。

ふいに茂みから矢が飛び出す。

キラはそれを体を右に僅かに動かし、よけた。

それを合図かのように何本もの矢が茂みから放たれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3538b/>

時空の旅人

2010年10月8日13時40分発行